

ミレーヴァ・アインシュタイン：「妻役割」と科学者問題

川島慶子（名古屋工業大学）

ミレーヴァ・マリッチ、のちのミレーヴァ・アインシュタインは東ヨーロッパのセルビア地方からスイスへの女子留学生であった。彼女がチューリッヒの連邦工業専門学校に入学したのは1896年、西ヨーロッパのいくつかの大学が女性の入学を正式に認めはじめてからすでに30年以上の月日が流れていた。ミレーヴァに遡る事5年前、マリア・スクオドフスカ、後のマリー・キュリーがやはり「東」のポーランドを離れてソルボンヌ大学理学部に入学した。つまりミレーヴァはキュリー夫人の後輩のような存在なのだ。アルベルト・アインシュタインがミレーヴァ・マリッチと恋に落ちたとき、確かにこの恋人たちは自分たちの未来の姿として、キュリー夫妻のような科学する夫婦というイメージを抱いていたのだ。彼らが結婚した1903年はまた、キュリー夫妻が第三回ノーベル物理学賞を受賞した年でもある。

しかしこの新しい東西カップルアインシュタイン夫妻は第二のキュリー夫妻にはならなかった。双方の両親から結婚の許しを得る前に、ミレーヴァは未婚の女子学生のまま妊娠してしまう。これは最初のつまずきだった。子供は里子に出され、現在に至るまでその足跡はわからない。ミレーヴァは期待をかけてくれた両親にも、自分に宿った子供にも罪の意識を背負ったまま学業を中断せざるを得ず、アルベルトよりもはるかに優秀だった数学の成績が、その経歴に生かされることはなかった。「僕たちはひとつの石（アイン・シュタイン）だ」と新妻に呼びかけたアルベルトは、従来の夫役割に安住して家父長の権威を振りかざしはしなかったが、ミレーヴァには当時の妻役割を大きく超えて活躍することができなかった。ポストのないまま、新婚の妻は夫の科学研究に積極的に協力したが、子供が生まれ、夫が大学に職を得るようになると、ミレーヴァの役割は伝統的な妻役割のなかに閉じ込められてゆく。アルベルトはもはや妻に自分の研究の相談をしない。

「ひとつの石」は単なる幻想だった。それはしょせん強者が弱者に語る夢物語にすぎない。アインシュタイン夫妻はふたりの人間、ふたつの石なのだ。そしてこの「ひとつの石」的発想は、アルベルトの独自の見解というよりも、近代産業社会のもたらした夫婦観の賜物だった。高度な科学教育が女子に門戸を開いた時代は同時に、「男は外、女は内」という男女の補完性を強調する時代でもあった。ミレーヴァは矛盾するこのふたつの思想の間を生きた女性である。彼女の学問と愛の挫折はまた、生きた現代の問題でもあるのだ。